

医大ニュース

No.68 2000.5

発行 京都府立医科大学

〒602-8566 京都市上京区河原町通

丸太町上ル梶井町465

TEL 075-251-5210 FAX 075-211-7093

学長就任あいさつ

井端泰彦

この4月より学長に就任することになりましたが、本学構成員の皆様方に一言就任のご挨拶を申し上げます。

本学は明治5年(1872年)栗田口青蓮院に設けられた療病院を発祥とし128年の歴史を誇る我が国でも有数の医科大学であります。しかし、国立大学が独立行政法人化されようとしている現在、本学も古い歴史と伝統の上に胡座をかいているわけにはゆきません。全学構成員が丸となり本学が21世紀に生き残り、かつより発展するかについて明確な理念を持ち努力しなければなりません。

本学は学部を有する限り学部教育を充実させ関係病院と緊密な連携のもとに充実した卒前、卒後教育を行い、社会のニーズに対応できる人間味豊かな、かつ感性に富んだ医師、看護婦(士)を育成し、京都府民に信頼され期待される医療を行うことが第一義であると考えます。

一方、旧帝国大学が順次大学院大学化し、医学部を母体とする古い大学や大阪市立大学などの公立大学も大学院重点化を行いつつある現在、本学も教養、基礎、臨床医学教室が一体となり、本学の特徴を生かした研究ユニットを設立し、本学特有の大学院重点化をはかる必要があります。その中で21世紀の世界の医科学をリードするような研究者を育成せねばなりません。私も出来

得る限りの努力を払いたいと思います。

本学では昨秋から大講座化を旨とした外科学教室の再編と診療科のディビジョン化、内科の診療ディビジョン化が開始されましたが、今後内科学教室の大講座化及びディビジョン化を促進する必要があります。基礎、社会医学教室も大講座化による再編成について現在議論され準備が進められています。

本学は現在、非常に多数の課題を抱えております。病院部門の60数億円から70億円に及び京都府からの繰入金を減少させるためにより一層取り組む必要があります。それには、いろいろの現場における効率化(在院日数の短縮、病院利用率の向上、病棟の統廃合など)を図る必要があります。この点は既に外部評価委員会からも指摘されております。また、附属病院として診療の目玉(例えば、再生医学、癌の化学療法、遺伝子治療、リハビリテーション医学など)をつくる必要があります。

現在、京都府の財政も非常に厳しい状況ですが、出来るだけご理解いただき下に挙げました課題の実現に全力で努力し、将来の発展につながるようにしたいと考えます。課題につきましては、4年制の看護系学科の開設、分子医科学教室(仮称)の開設、電算化によるオーダリングシステムの完成、医療情報システム、救急医学への対



応、福利厚生施設、精神科病棟、狭隘老朽化した外来病棟などの出来るだけ早期の建築、教養学舎の移転などがあります。

昨今新聞紙上で毎日のように不注意による医療事故の記事が掲載されております。本学におきましても医療の現場は勿論、RI実験、DNA組み換え実験などにおいて事故が発生しますと人命にかかわる危険性があります。この点、関係各位には呉々も注意を怠らないようお願い申し上げます。最後に全学構成員の皆様にはそれぞれの持ち場で大学のために自覚と責任を持ち仕事をさせていただいておりますが、皆様が気持ちよく仕事をいただけますように私も出来るだけ皆様の声に耳を傾けたいと思っております。最後に皆様方のご健勝をお祈りいたします。

目次

1 学長就任あいさつ	1	5 教授就任あいさつ	
2 管理職就任あいさつ		・第一生理学教室	5
・研究部長	2	・第二生理学教室	5
・医療技術短期大学部長	2	・小児科学教室	6
3 学長退任あいさつ	3	6 防災訓練実施報告	6
4 停年退職を迎えて		7 平成12年度予算概要	7
・第一内科学教室	3	8 特集	
・小児科学教室	4	・看護という仕事	8
・臨床検査医学教室	4	9 クイーンマーガレット帰任報告	8
		10 卒業式・入学式	9
		11 形成外科スタート !!	10

管理職就任あいさつ

研究部長再任にあたって



研究部長
生化学教室教授 西野 輔翼

2年前に医大ニュースで研究部長の役割について私見を述べさせていただきました

が、基本的には今も変わったところはありません。しかし、この2年間の体験を通じて、方法論としてはもっと攻撃的なことを考えていかなければまったく前進できないと感じています。そして、足踏み状態でとどまっていたのでは結局のところいつまでたっても責務を果たせないと考えています。したがって、今後は研究部長の方から皆様へ向けてかなり積極的な提案をどんどんぶつけさせていただくことになると思います。時には間違った思いこみで提案してしまうこともでてくるのではないかと自ら危惧しておりますが、そのような場合には鋭く御指摘下さい。謙虚に受け止めさせていただき、誤った点は誠意をもって修正させていただきます。いずれにしても大学人がそれぞれの強烈な個性を露わにして共同作業を行う時、かなり緊張した状況が生じるのは避けることのできないことですが、誠実な対話による調節は十分可能であると信じています。

さて、これまでも機会があるたびに主張してきたことですが、なんとしても京都

府立医科大学を「強い大学」にしたいと思っています。

その一方で、どんな計画でも実を結ばせるまでには長い忍耐が必要であり、対話が成立するための心の余裕が確保されていることが重要であるということもよく分かっているつもりです。

以上の二つは「攻」と「守」で一見相反するように見えますが、両立は可能ではないでしょうか？

パッション先行型の研究部長は、短所が目立つであろうとは思いますが、きっと長所もあるはずで。冷静に、しかし同時に暖かく見守っていただき、御支援いただければありがたく存じます。どうぞよろしくお願いたします。

医療技術短期大学部 4年制化に向けて



医療技術短期大学部長
第三内科学教室教授 加嶋 敬

平成10年4月、医療技術短期大学部長に就任致しましたが、この度引き続き勤めさせて戴くことになりました。誠に光栄なこ

とと思いますとともにその責務の重大さを痛感しているところであります。

本学部は以前の本学附属看護専門学校の廃止と同時に新たに平成5年4月に本学に併設する医療技術短期大学部として、看護学科、保健学専攻、助産学専攻の部門が設置され、毎年160余名の卒業生を送り出し、今日に至っております。

保健医療に対する保健医療従事者の果たす役割は、時代とともにますますその重要性を増し、かつより高度な専門性を求められています。さらなる医療の発展のためには、医学研究の進歩や医療設備の改善の他により医療従事者の育成が重要で、そのひとつに、高度な専門知識・技能、豊かな人間性を備え、幅広い視野に立って問題に対応出来る優秀な看護婦(士)、保健婦、助産婦の養成が基本的かつ重要な問題であります。

この観点から本学部もさらなる発展と充実を図らなければなりません。平成11年度から医療技術短期大学部4年制化準備特別委員会が正式に発足し、活動が始められました。委員会の審議を促進するため、実働組織として総務、教務および入試の各

ワーキング・グループが組織され、それぞれ組織改変、カリキュラム編成、教育設備、入試方法などが検討されて来ました。基本的な骨子は出来上がり、本年度はさらに詳細なことについて具体化を進めることになっており、京都府、本学の各部門のご協力を戴き準備は順調に進んでいるものと考えております。

しかし、今後解決しなければならない懸案も少なからずあります。文部省への申請に向けて、設置者である京都府当局にはなお一層のご理解を戴き、また、本学構成員の皆様には本学全体の懸案とのご理解を戴き、是非とも4年制化の実現に向けて皆様のご支援を戴きますようお願いするものであります。

学長退任あいさつ

本学を去るにあたって



前学長 栗山 欣弥

この3月末、平成6年以来2期6年の学長の任期が満了致しました。顧みますと、

昭和46年に本学薬理学教室を担当するために長年住み慣れた米国を後にして帰国して以来、29年の歳月が流れたこととなります。この間、教授として23年、学長兼務の教授として2年、そしてまた専任学長として4年、勤務させて頂いたこととなります。このように長くお世話になりながら、学問的にも、また大学の管理運営の面においても、大した貢献が出来なかったことを申し訳なく思っております。

一方、同僚であった教授の先生方は勿論、総ての本学の構成員から暖かい御支援と御声援を得ることができ、幸せで想い出多い日々を送ることが出来ました。また学長として勤務させて頂いた6年間に、荒巻京都府知事様をはじめとする京都府の方々、府議会の方々、更に本学事務局の皆様から頂いた数々の御支援と御協力に心から謝意を表したいと思います。基礎医学学舎や附属病院駐車場の完成、脳・血管系老化研究センターの病態病理学や社会医学/人文科学部門、心臓血管外科や形成外科の新設、

外科や内科の診療科ディビジョン制の開始、医療技術短期大学部の4年制大学化など、21世紀に向けて本学が発展するための準備の多くが、これらの皆様の御協力により軌道に乗ったからであります。

経済不況や急速な高齢化社会の進展に伴う社会の歪みなど、私たちを取り巻く現在の環境は必ずしも明るい訳ではありませんが、上記の様な良い協力関係を保ちつつ、皆さんが英知を集め、井端学長のもと、力を合わせて、我が京都府立医科大学を益々発展に導いて下さるよう心からお願いし、私の退任の挨拶と致します。長い間お世話になり有難うございました。

退官教授あいさつ

『停年退職を迎えて - これからの人生にワクワクしています』



第1内科学教室教授 近藤 元治

昭和53年に第1内科学教室の教授を拝命してから22年。新進気鋭のはずの私も、学内ではついに長老となり、ここに停年退職の日を迎えました。第1回目の病院長時代(平成5-7年)には阪神淡路大震災があり、2度目の病院長のとき(平成9-11年)には府から経営改善を求められ、皆様には

大変なご苦勞をおかけしました。ここまで無事に勤めあげ、第1内科を隆盛にすることが出来たのは、大学の内外の多くの皆様のご支援のお陰です。この場をお借りして、心からお礼を申し上げます。

人間の行動は、その人の持つ遺伝子(DNA)が支配すると申します。ワタシのDNAは不正を許さず、妥協を嫌い、ひたすら府立医大を愛し続けました。この22年の間、第1内科や私自身が<得>をする選択を捨て、ただ大学が良くなることばかりを考えましたから、第三者から見れば世渡りが下手で、随分損な人生を歩んだことになるでしょう。でも、退官を迎えるにあたり、「私のDNAを誉めてやりたい」というのが実感です。

人生(LIFE)には、ウソ(LIE)とモシ(IF)が隠されています。IFはタラ・レバですから、もう一度やり直せるなら、上手に世渡りが出来るに違いありません。でも、ウソのない大学生活を送れたのは幸せでした。誰を誹謗することなく、中傷にはじっと耐えながら頑張ってくれた教室員に、お礼を言いたいのです。

平成5年に「医師からの助言 - 医療との上手な付き合い方(京都新聞社)」を出しました。本学を舞台に、医療にまつわるい

ろんなテーマを書いたもので、大変な好評を博しました。この度の退官を記念して、「ドク -- 赤ひげ登場(角川書店)」を出版しました。本学の助教授をやめて開業したはやらぬ医者、カクテルのギムレットを飲みながら医師と患者の人間模様を語る、とても面白い本なのです。お目にとまり、手に取っていただければ嬉しく思います。

今年の年賀状に、「近藤元治のF A宣言」と書きました。公務員を離れる私の今後にどんな人生が待ち受けているのか、想像するだけでもワクワクしてきます。皆様とはこれからも、いろんな機会にお目にかかると思います。どうせ、どこかで医療に携わっているに違いありませんから。もし私でお役に立てることがあれば、何でもお申しつけ下さい。喜んでお手伝いさせていただきます。

とりあえず、皆様の健康を祈りつつ、ご機嫌よう。

停年退職を迎えて お礼のあいさつ



小児科学教室教授 澤田 淳

本学を卒業して約40年、その間、インターンの期間、山田赤十字病院に約3か月、国立福井療養所へ10か月、ロンドン留学などの約3年間を除く37年間の長い期間、本学で過ごさせていただきました。故中村恒男先生の下で小児科学の臨床と研究の楽しさ、

厳しさを学び、楠智一先生の下で臨床・研究を広げ、発展させていただきました。その間に人間関係を壊すような大学紛争を経験するなど、堪え難い事もありましたが、多くの先生方に指導を受け、楽しく過ごしてきました。生化学教室の能勢善嗣先生、川崎尚先生、岩島昭夫先生から研究入門としての天秤の使い方から蛋白の純化やいろいろな酵素の測定、微生物学教室で岸田綱太郎先生、故片山胖先生から免疫学的な思考を、第2病理学教室の藤田哲也先生や高松哲郎先生（現教授）から顕微測光によるがん細胞のDNA量の測定など、いろいろな教室の多数の先生から勉強させていただきました。お陰様でいろいろな分野で成果をあげることが出来たと思います。特に、神経芽細胞腫の臨床・研究での業績は大きく、後まで評価されることを願っています。これには故三宅清雄先生から今日に至るまで両病理学教室の先生方の大きな協力があつたことを記し、お礼の言葉にさせていただきます。

長年にわたり、私個人は当然、小児科学教室にいただきましたご高配とご指導に対しまして心からお礼申し上げます。さらに、これまで一緒に仕事をしていただいた先輩、

同僚、後輩、いろいろとご協力いただきました関連病院の院長先生を始め皆様にお礼を申し上げ、感謝の意を表します。

大好きな京都府立医科大学、附属病院が一流であり続け、医療の状況の混迷、困難な時期ですが、さらに大きく飛躍される事を期待いたしております。

最後になりましたが教室の皆様、病棟、外来の看護婦さん、一緒に臨床、研究に楽しく過ごせた事を感謝しています。本当にありがとうございました。

教授停年退職を迎えて



臨床検査医学教室教授 吉村 學

本学を卒業して以来、生理学教室で基礎医学研究を、第二内科学教室で臨床医学研究と内科診療を、臨床検査医学教室、臨床検査部で検査医学研究、診断業務と医療情

報活動に携わって参りました。この長い大学生活の最大の喜びは基礎と臨床医学領域で研究生を送ることができたことでした。しかし如何なる業績を挙げたかを考えると苦しみともなりました。また診療面では高血圧学と内分泌学を担当し、臨床に強い本学附属病院の一角を担って働き、府民の為の医療活動に参画できたのも喜びでした。

昭和63年からは教授を拝命して、検査診断医学の学生教育や各科診療科医師への検査診断学教育（consultation）の充実と、患者の為の検査部にする様に努めて参りました。検査部の受付体制の整備、技師による24時間緊急検査体制の確立、検査報告システムのコンピューター化、検査の迅速検査体制を確立してきました。医療情報部長として病院のオーダリングシステムの構築に努力してきました。

研究活動は論文の質と量、業績で、また診療活動は臨床力、活動性、評判、患者数で評価できます。一方、病院中央部門の臨床検査は検査診断学活動や検査業務であり、その評価は容易ではありません。自動化・搬送化の時代にも拘わらず、国（私）立大

学と比べて予算額の少ない本学検査部の機器は耐用年数を越えたものが多く、我々の努力の範囲を超えたものもありました。検査のコンピューター化で迅速検査体制を確立しても、診療医に有効利用してもらえなければ宝の持ち腐れとなります。検査部は診療活動の縁の下の手力持ちとして診断情報を提供して、先端医療を行う附属病院機能を支えております。

臨床検査は、診療科と異なり病院の中央部門を担当しておりますので、臨床検査が発展すれば各科の診療力のレベル・アップにつながります。検査診断学に強い医師の育成は本学の発展に、また府民の医療の向上に繋がります。最後に私共の教育・研究、診療、業務活動をご支援下さいました皆様方に感謝申し上げますと共に本学の益々の発展を祈念申し上げます。

教授就任あいさつ

教授就任にあたって



第一生理学教室教授 丸中 良典

私は、本学を昭和54年に卒業後、滋賀医科大学、アメリカ合衆国のテキサスおよびエモリー両大学医学部、カナダのトロント大学医学部で研究教育に従事した後、21年振りに母校に戻って参りました。従いまして、本学での研究教育に携わるのは、今回が初めてでございます。滋賀医科大学では、

生理学講座の助手として、7年間お世話になりました。その後の14年間は、北米で過ごしました。トロント大学小児病院研究所には9年間在籍し、自らの研究室を立ち上げた関係上、特に思い出深い大学となりました。北米での14年間は、上皮組織におけるイオン輸送のホルモンによる制御機構の解明を目指し研究を進めて参りました。

私がテキサス、エモリー両大学でまず手がけたのは、遠位尿細管上皮細胞におけるナトリウムイオン輸送の抗利尿ホルモンによる制御機構の解明でありました。パッチクランプ法と呼ばれる電気生理学的方法を用い、ナトリウムチャンネルを通るナトリウムイオン電流を単一イオンチャンネル（単一タンパク質）レベルで測定し、抗利尿ホルモンがナトリウムチャンネルを細胞内貯蔵部位から管腔側膜上へと移動促進させることにより、管腔側膜上に存在するナトリウムチャンネルの数（密度）を増大させ、ナトリウムイオンの再吸収を促進させるということを見い出しました。

トロントに移った後は、分娩時における胎児肺の肺腔内液クリアランスの機構解明に取りかかりました。この肺腔内液クリアランスは、分娩時のストレスにより上昇し

た血中カテコラミンがナトリウムチャンネルを活性化させた結果によるもので、このナトリウムチャンネルの同定をパッチクランプ法を用いて、単一イオンチャンネルレベルで行ないました。また、このカテコラミンの細胞内情報伝達系が、cAMPにより引き起こされた細胞容積減少を介した protein tyrosine kinase を介する経路によることを明らかにし、細胞容積の持つ生理学的意義を見い出しました。

今後は、今まで行なって参りました上皮組織の研究にとどまらず、生体における生命現象を細胞・分子レベルで生理学的見地から幅広く、また深く研究していきたいと存じます。

今後は、学生時代を過ごしたとはいえ、新天地でもある母校で、しかも長い伝統を誇る本学の第一生理学教室で研究教育に携わる機会を与えていただきましたからには、もとより微力ではございますが、第一生理学教室および母校の発展に全力を尽くす所存です。なお一層の御指導と御鞭撻の程、賜りますよう、お願い申し上げます。

神経科学研究と教育の抱負



第二生理学教室教授 木村 實

平成12年5月1日付けで第2生理学教室を担当させていただくことになりました。

最近の科学と技術の進歩はめざましく、人間の営む生命現象は行動や病気のレベルから呼吸・循環機能、筋肉、神経・脳機能

のレベル、その機能を担う細胞の振舞い、更に細胞機能を担う分子や遺伝子の振舞いに至るまで極めて多くの知見が得られています。21世紀に向けたミレニアム科学計画でもゲノムプロジェクトが大きな比重を占めています。さて、生理学の生理学たるゆえんは、生命現象の“機能”を明らかにすることです。どのような形態をしているのか、どの場所にどのような物質が存在するのか、ということを知るだけでは満足できません。私は、生命現象は究極的には分子や遺伝子の言葉で記述されなければ理解されたことにはならないと考えていますが、それには分子、遺伝子の振る舞いから細胞、器官そして個体の振る舞いとしての行動までの筋道（因果関係）を矛盾無く説明できるということが前提となります。例えば、私の属する神経生理学の分野では、遺伝子とその機能分子の発現を障害して統合された後のグローバルな機能（行動）の異常を調べる、いわゆるノックアウト動物や、Antisense ablationで機能障害を調べる研究が近年盛んです。これらの研究は、現状ではまだ問題点が多いとはいえ、遺伝子から

行動までを統一的に説明しようとする努力のひとつであり、将来的に問題点を克服しつつ積極的に進められるべき研究でしょう。極めて多様で新しい実験技術の選択が可能となった今、生理学者には、多くの研究手法を駆使して実験研究を挑戦的に行うと共に、分子、細胞から個体の振る舞いにまで至る生命現象の“しくみを考え”、具体的な仮説として説くことが求められております。特に脳の研究では、生命科学的なアプローチだけでは十分でなく、心理学や計算理論などを含む実に多くの研究戦略が必要です。学内の、伝統ある神経科学研究を推進しておられる先生方をはじめとして、学外とも協力した研究を進めることによって、京都府立医科大学の研究と教育に微力ながら貢献したいと思っております。何卒よろしくご指導ご鞭撻をお願い申し上げます。

ともに良い小児科医を育てたい



小児科学教室教授 杉本 徹

平成12年5月1日付けで、京都府立医科大学小児科学教室を担当しております。

私は、昭和45年に京都府立医科大学を卒業し、研修医、大学院医学研究科を修了し、米国に留学し、NIH、National Cancer Instituteで腫瘍免疫、その後New York 州立Roswell Park Memorial Instituteで細胞培養と細胞生物学を学びました。またその間、一般病院

(社会保険神戸中央病院、国立鯖江病院、済生会滋賀県病院など)で勤務し、平成5年7月1日付けで宮崎医科大学小児科学教室に教授として赴任致しました。そしてこの度、平成12年5月1日付けで、7年振りに京都府立医科大学小児科学教室に転任して参りました。

宮崎時代の7年間に、京都は京都駅、京都ホテルなど近代的なビルが増え、また京都府立医科大学の基礎研究棟も完成して、時の流れの早さを実感しています。

小児科学領域には大人に見られない特殊な疾患(例えば先天性代謝疾患など)があること、講義・ポリクリを通じて触れることのできた小児科学教室の雰囲気が良かったことなどより、小児科学を専攻致しました。

病気の子供さんは、病状が悪くなることも早いのですが、良くなることも早く、1時間、1日間の治療が生死を左右することもあります。しかし元気になった子供さんが、素晴らしい笑顔で反応してくれた時の喜びを心の糧に、また一方、不治の病で亡くなった子供さんを治療しては、現在医学の無力を嘆き、「臨床に役立つ研究」を合

い言葉に、卒業以来30年の歳月が過ぎました。

入局時の昭和45年頃に、大学附属病院で見られた下痢、麻疹などの感染症、腎炎、ネフローゼは、公衆衛生の向上、抗生物質とワクチンの普及で減少してきました。代わって悪性腫瘍、未熟児、肥満、心身症、先天性奇形(心疾患を含む)、アレルギーなどの疾患を持つ子供さんの入院が増え、病気の種類が変化してきました。

私自身の卒業後の臨床と研究のテーマは小児悪性腫瘍の細胞・分子生物学的特性を明らかにして、小児悪性腫瘍の診断と治療成績を改善する方法を見出すことです。

小児科学教室のさらなる発展のため、①開学以来育まれてきた京都府立医科大学小児科学教室の伝統と路線を引継ぎ、②もし必要な点が有れば、積極的に改善と改革を行い、③「和と切磋琢磨」、「臨床医学と生命科学への貢献」、「継続は力」を座右の銘として、④大学の使命である臨床・研究・教育の3本柱のバランスを保ちながら、小児科学教室の発展に努めて行きたいと決意を新に致しております。皆様方のご指導、ご協力を何卒よろしくお願い致します。

大規模火災に備えて

~ 上京消防署との合同消防訓練が実施される

3月1日(水)午後3時から、本学基礎医学学舎において安野病院長以下多数の教職員が参加して上京消防署との合同消防訓練が実施されました。

今回の訓練は基礎医学学舎が竣工後、同学舎において消防訓練を実施していないことから、またその規模に応じた訓練を行う必要があることから、上京消防署の協力を得て、初期消火活動、避難活動、上京消防署による消火・救助活動が行われました。出火場所は基礎医学学舎7階微生物学教室とし、6、7、8階各教室の教職員、看護婦、保安職員と上京消防署員約60名が、訓練に取り組みました。

初期消火では微生物学教室の教員をはじめ、基礎医学学舎7階各教室の教職員も消火器による消火活動を行い、保安職員とともに屋内消火栓を使用して放水の演習を行いました。また教職員による救助袋を使用した避難活動も行われ、その後、消防署によるはしご車を使った救助訓練、消防車からの放水の演習が行われ訓練は無事終了しました。消防署からは、火災発生時、どの

あたりに誰がいるか、どういう危険物がどこにあるかを消防署員に伝えて欲しいとの指導がありました。この貴重な体験を生かして今後の防火管理体制の整備を図ることが必要です。

訓練終了後、安野病院長より火災に関しては職員一人ひとりが火を出さないことを心掛けることがなによりも大切であるとの訓辞がありました。その意味で今回の訓練を通して、職員が防火意識をさらに高め、今後一層の防火管理の徹底を図りたいものです。



訓辞を述べる病院長



救護活動の様子



消防署による放水演習

平成12年度 医科大学当初予算の概要

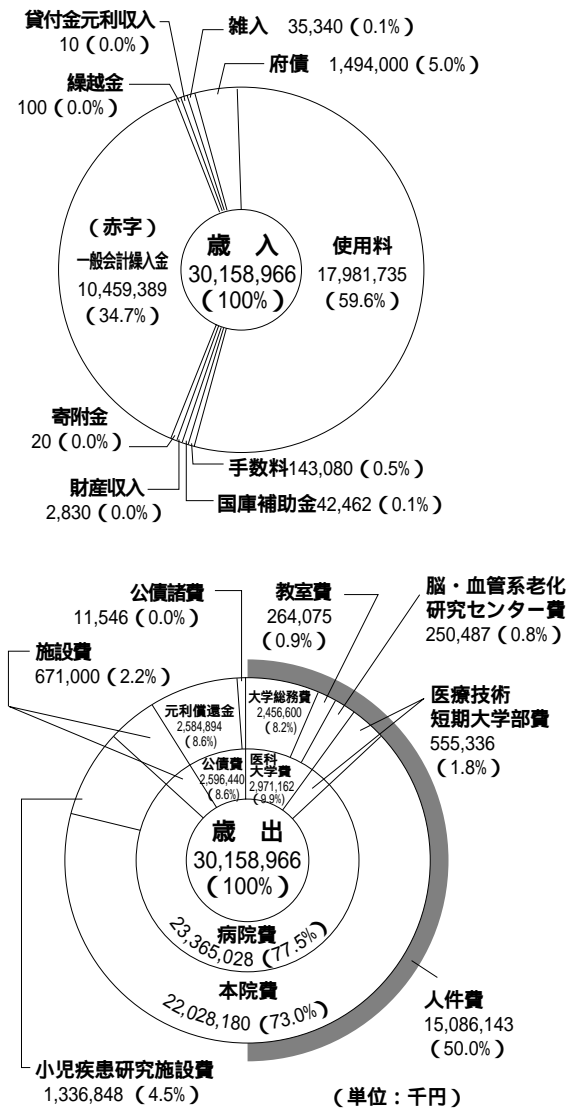
平成12年度当初予算が府議会2月定例会で可決成立しました。長引く不況による府税収入の低迷で、京都府の財政はかつてない打撃を受け、借金である府債残高が初めて1兆円の大台を突破するなどの危機的な状況に陥っています。

本学としては、こうした厳しい財政状況の下、歳出予算が厳しく抑制される中、教育・研究・診療を通じて府民福祉の向上に寄与すべく医科大学の予算の確保に努めましたところ、大学部門においては昨年に引き続き基礎医学学舎（第2期）の建設費や中央研究室の備品整備費が、病院部門では大型診療機器（磁気共鳴診断装置）の整備費や総合電算システムの整備費などが認められました。

しかしながら、その財源は一般会計からの繰入金（赤字）が100億を超える多額にのぼっており、大学及び附属病院運営の経営改善の更なる推進が求められているところです。

今後とも、附属病院の経営改善を中心として、教職員一同が節電・節水などは勿論のこと、日常の業務点検を徹底することにより無駄を省き、より一層効率的な運営に心がけていくとともに、府民の健康を守る地域医療の中核施設としてその役割を果たし、府民の期待と信頼に応えていかなければなりません。

平成12年度京都府立医科大学および附属病院特別会計当初予算の状況



主な事業内容

教育・研究の充実

- ・ 基礎医学学舎（第2期）建設費 6億1,500万円
近代医学の進歩に対応した医学・医療の発展に資するため、基礎医学学舎（第2期・第2工区）の建設工事を平成11年度に引き続き整備します。施設の内容は、顕微鏡実習室など主に学生の学習施設であり、これで基礎医学学舎が全て完成することになります。完成は平成13年春の予定です。（4億2,500万円）
基礎医学学舎：総面積 25,811㎡ 総事業費 163億3,900万円
- ・ 中央研究室備品整備費 5,000万円
基礎医学学舎（第2期・第1工区）の完成に伴い整備拡充された中央研究室で使用する、高度な研究水準の維持発展を図るための研究用機器が特別な予算として認められ、平成11年度に引き続き整備充実できることになりました。（1億円）
- ・ 学外臨床実習経費 100万円
臨床実習教育の充実を目的として、大学外の医療機関等において学生の臨床実習を行い、地域の中で育つ医療人を養成します。（新規事業）

開かれた大学づくり

- ・ 公開講座開催費 140万円
本学の医学的研究を府民に還元するため、公開講座を実施します。
- ・ 国際交流事業費 211万円
中国医学研究生を受け入れます。（1名）
エディンバラ市クィーンマーガレット大学へ教員を派遣します。（1名）
- ・ 脳・血管系老化研究センター設立10周年記念事業費 100万円
設立10周年を記念し、講演会等を開催し、『10年の歩み』を作成します。

患者サービスの向上

- ・ 診療機器整備費 3億4,800万円
地域医療機関として必要な機器を整備することにより、受診しやすい診療体制の整備を促進し、受診患者の増加を図ります。（3億4,800万円）
- ・ 大型診療機器整備費（MRI）
特定機能病院にふさわしい高度医療の提供を確保するため、老朽化した大型診療機器を計画的に更新します。新機種への更新により、検査時間が短縮され、複数部位の同時検査が可能となるなど、患者サービスの向上につながります。（2億6,000万円 シンチレーションカメラ、手術台）
- ・ 総合電算システム整備費 2億円
医学・医療の進展に伴い、病院経営は複雑、多様化していることから、本学附属病院において総合電算システムを整備し、待ち時間の解消等を図ります。（2億300万円 平成14年4月全面稼働予定）

特集

看護という仕事 看護婦の手から心へ



看護部長 菊地美代子

今から、15年位も前、腎移植ドナーの30代後半の女性に、術後の清拭をしていた時、その方が「ここでは傷が痛いと言えるけれど、家に帰ったら言えないわ」とふっと漏

らされました。清拭の手を休めずに「どうしてですか」と尋ねますと、「兄のために腎臓を提供することを夫は反対していて、もし、何かあったらと、手術場に行く姿を写真に撮っていた・・・」術後経過も順調で、一見しっかりされた方の内面にある思いに触れました。ドナーは基本的には健康な方です。しかし、健康故に、手術をするまでの葛藤と家族の様々な思いがあることに気づかされました。体を拭き終わる頃には「聞いて下さってありがとう」と晴れ晴れとした口調で言われ、数日後には元気に退院していかれました。清拭のこころよいスキンケアが、その人の心の思いを吐き出させる役割をしたのでしょうか。小島通代は著書『ナースだからできる5分間カウンセリング』で「体を清潔にしたり、髪をとかず、ひげを剃るなどの整容をして、爽快感を味わうと、生きることに積極的な気持ちになる」と保清の心理的効果を述べ、「皮

膚はプライバシーの最終的な境界線である」として、清拭が相手の心を開ききっかけになること。「清潔の援助は、患者が快い状態で看護職と親しく接し心を通わせるよい機会」と述べています。看護者がスキンシップを通して爽快感を与え、清拭の時間を活用して一定の時間を彼女と共にいることが、効果的な心のケアになるのでしょうか。

多忙な業務ですが、身体的ケアに多くの時間を割いている看護婦だからこそ、相手の意識的な部分のみの働きかけだけではなく、無意識の部分にも働きかけることができる機会を持っているのでしょうか。また、24時間勤務の看護婦は、病状の告知後などの苦悩や不安で眠れない場面に直接出会うことができ、不眠のケアを通して相手の心に触れ、効果的な対処ができるのではないかと思います。

クイーンマーガレット帰任報告

医療技術短期大学部看護学科教授 森田 益次

平成12年3月20日から5日間、米国エディンバラ市クイーンマーガレット大学(QMUC)へ相互交流と共同研究を推進する目的で出張しました。その概要をここに報告します。

エディンバラは、エディンバラ城、ホルロード宮殿、ロイヤルマイルの家並、山全体が公園であるホルロードパークなどの見所があり、自然と調和した文化的歴史的に由緒ある都市です。

英国の保健医療はNHS(国民保健サービス)という公共サービス方式で行われ、我が国の社会保険方式とは全く異なっています。保健サービス需要を充足するためには多職種、多資格のマンパワーが必要です。

私が訪問したQMUCの保健・看護学部の看護教育も、国の政策を反映して、4年制の看護教育が基本となり、その上に資格を得るための卒業教育(修業年限は1年以内)が、地域保健看護では7種類(小児、障害者、精神保健、地域看護、臨床全般、

訪問看護、学校保健)という多岐に及んでおり、臨床看護では専門看護婦養成(乳ガン、臨床神経、消化器、遺伝看護、緩和ケア、脳卒中)のための7コースあります。さらに修士課程(修業年限は最短45週)が、保健・看護学部に限っても2コース(看護学修士、プライマリケア修士)開設されています。QMUCの他の学部では博士課程がありますが保健・看護学部では開設されていません。

10年前に米国の看護事情を見聞したときは、短期大学が看護教育機関の主たる担い手であったが、米国は医療機関への看護婦の供給が教育機関の役割であり、一方英国は保健機関にも看護婦を供給するという使命があるので、専門が細分化され、修業年限も長期間になっているものと思われます。

エディンバラ滞在中、近郊の保健センター、ロジアン大学病院西総合病院、アストレー・アインスリー病院心疾患リハビリテーション部門を見学する機会がありました。

いずれの施設も利用者はほぼ無料で、費用は税金で賄われていましたが、福祉施設は保健医療とは別ということで、またの機会にその実態を見聞してみたいと思います。



卒業式・入学式

医科大学の平成11年度卒業式が3月3日に挙行されました。学部卒業生が106名、大学院修了生が22名です。

学部卒業生中、学業成績が最も優秀であった学生に贈られる「京都府立医科大学学長賞」には、室谷佳秀君がその栄誉を称えられました。

在校生代表の5回生、小山智弘君の温かな送辞を受けた後、卒業生を代表して若松英雄君が、卒業を迎えた喜びと感謝を述べるとともに、理想の医師像を心に持ちながら精進していきたい、と力強く宣言しました。

平成12年度の入学式は、医科大学が4月6日に、大学院が4月7日に挙行されました。入学者は、医科大学100名、大学院61名で、医師・医学博士を目指して勉学と研究に励むことになりました。

在学生代表の6回生、外村仁君からは、医学部6年間の生活や、幅広い分野の人々とのコミュニケーションの重要性についてのアドバイスなど、心のこもった歓迎の挨拶がありました。

また、医療技術短期大学の平成11年度の卒業式は、3月10日に挙行されました。

医療技術短期大学部看護学科においては5期目の卒業生98名が卒業し、また専攻科では4期目の卒業生保健学専攻50名、助産学専攻15名が卒業しました。

医療技術短期大学の平成12年度の入学式は、4月5日に挙行されました。入学者は、165名（看護学科100名、専攻科保健学専攻50名、専攻科助産学専攻15名）で、看護婦等を目指して勉学に励むことになりました。



医科大学 卒業式



医科大学 入学式



医療技術短期大学部 卒業式

形成外科スタート !!

本学附属病院では、「わかりやすく、より高度で、より専門的な医療」を目指して昨年9月に外科を、12月には内科の診療科の再編成を実施してきましたが、この度、その一環として「形成外科」を新たに4月17日から開設しましたので、その内容を紹介します。

1 対象疾患

顔や手足の変形や欠損の再建治療を行います。

- (1) 腫瘍（皮膚及び皮下軟部組織の腫瘍、血管腫その他のあざ及び腫瘍摘出後の再建）
- (2) 外傷（顔面、手足の外傷）
- (3) 先天異常（唇裂口蓋裂、小耳症、合指症など顔面手足の先天異常等）

具体的には、顔にできた良性腫瘍をできるだけ傷が目立たないように工夫して切除したり、悪性腫瘍の切除後の欠損や交通事故など外傷によって生じた欠損や変形を修復したりします。先天異常についても、できるだけ目立たなくすることにより、患者の心理的負担を軽くするよう努めます。あざの治療については、色素治療用レーザー等を用いた治療を行います。

2 スタッフ

- ・専門の担当医3名（西野助教授、石田講師、沼尻助手）
- ・運営責任体制として診療部長、診療科長を設置

3 外来診療日（週3日、午前）

毎週月・水・金曜日の午前

4 診療場所

外科外来診察場（病棟2階）

